

やま は とら くす

山葉寅楠

美しき旋律を求めて — 西洋楽器の国産化 —



山葉寅楠 (1851 ~ 1916)

写真：ヤマハ(株)提供

■オルガン修理が楽器製造の契機に

山葉寅楠は、1851(嘉永4)年、紀州藩士の山葉孝之助の三男として生まれた。1872(明治5)年、21歳のとき、長崎に出て時計職人の下で修業の後、大阪の西洋式医療機械商の河内屋に修理工として勤めた。

寅楠は、1883(明治16)年、浜松病院の医療機器の修理の為、河内屋から浜松に派遣された。

寅楠の楽器との出会いは、1887(明治20)年、浜松尋常小学校よりオルガンの修理を依頼されたことであった。オルガン修理の際、修理の傍ら部品を調べ、図面に書き、設計図をもとに2ヶ月で、自作オルガンの試作品を完成させた。この

時の資金面での協力者は小松屋の飾職人河合喜三郎であった。試作品ができたとは言え、楽器としては不十分なものであった。寅楠には音楽の知識は無く、調律という言葉さえ知らない有様だった。あれこれと伝手を辿って、静岡県令関口隆吉より音楽取調掛の伊澤修二を紹介された。

1887(明治20)年10月末、寅楠と喜三郎は伊澤の評価を受ける為、東海道を徒歩で箱根を越えてオルガンを運んだ。伊澤からは「調律が不正確」と言われた。そこで寅楠は1ヶ月間東京に留まり、音楽取調所で聴講生として音楽理論と調律を学び、帰浜してオルガン第2号を製作し、再び、箱根越えて伊澤の下に持参し、何とか認められた。

その後、伊澤の推薦もあり、寅楠のオルガンが評判となり注文が急増し、1889(明治22)年、(資)山葉風琴製造所を設立し、成子町の坂の上にあった寺へ移転した。1年ほどして八幡地へ移転、さらに翌年、板屋町に移転し、約30年間この地を拠点とした。しかし、1891(明治24)年、株主総会で会社解散に追い込まれる。再び、喜三郎と二人きりになったが、「山葉楽器製造所」を設立した。そうした騒動の中でも山葉オルガンの評価は高まっていた。

■ピアノの国産化に成功

1897(明治30)年10月に資本金10万円で日本楽器製造(株)(現・ヤマハ)に改組し、初代社長に就任する。この頃より本格的にピアノ作りへの取組みを開始した。

寅楠は1899(明治32)年、文部省使節として米国視察に出発した。5ヶ月間かけて100箇所ものピアノ工場をまわり、ピアノ



1899(明治32)年製の日本楽器製造のピアノ 浜松市楽器博物館蔵

作りへの技術、知識、設備を学び、加工機械を手に入れ帰国した。

1900(明治33)年、寅楠の持ち帰った機械をもとに、日本楽器製造において国産第一号となるピアノが完成した。1907(明治40)年になると、日本楽器製造はピアノとオルガン生産で日本一となっている。

寅楠は技術者を育てる見習生制度を始めている。この見習制度のもとで、河合小市(河合楽器製作所創業者)や大橋幡岩(大橋ピアノ研究所創業者)など優れた技術者を数多く輩出し、日本における楽器産業の礎を築き上げた。(漢人省三)



山葉オルガン第一号型 写真：ヤマハ(株)提供